様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２８０３

研究課題名（和文）パフォーマンス評価を活用した音楽学習における支援の類型化

研究課題名（英文）Performance Assessment and the Classification of Types of Support for Music Learning

研究代表者
根津　知佳子（NEZU, Chikako）

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：４０３３５１１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，音楽的対話を重視した創造的音楽活動の実践分析を通して，音楽学習における支援の在り方について検討した。具体的には，グループ活動について，音楽的対話（根津，2002），エンゲストロームの活動システム（1987），ボクシルの覚識の連続体（1985）の概念やモデルを援用してパフォーマンスの変容を可視化し，音楽的認知の課題と支援方法を提示した。また，音楽学習の壁（つまずき）の要因として挙げられる「身体・運動」「認知」「技能」「心理」に加えて，「文化」「環境」の観点の重要性を明らかにし，SDGｓを展望したカンボジアの合奏支援の在り方を再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では，音楽的対話，活動システム，覚識の連続体の３つのモデルを用いて，創造的音楽活動におけるパフォーマンスの変容を可視化し，多様な学習の壁（つまずき）の要因や支援の方法を明らかにした。特に，「図と地の分化」が音楽的認知の発達だけではなくアイデンティティの確立に深く関わっていることを具体的に記述することができた。

研究成果の概要（英文）：This research examines the state of support for the music leaning through the practice and analysis of creative music activities emphasizing musical dialogue. Specifically, in relation to group activity, the concepts and models of Musical Dialogue, Activity Systems, and A Continuum of Awareness have been cited to visualize the transformation of performance, and musical recognition-related issues and support methods have been presented.
This study has also clarified the importance of cultural and environmental perspectives in addition to the commonly raised causes of barriers and setbacks in music learning, such as factors connected to body and motion, recognition, technical ability, and mentality, with a reconsideration of the state of support for ensembles in Cambodia, where SDGs are a key issue.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽学習　パフォーマンス評価　音楽的認知　図と地の分化　音楽的経験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年，現代的教育課題である「小１プロブレム」の解決のために，保幼小の移行（垂直的連携）や異校園種間・関連機関の連携（水平的連携）が重視されている。音楽学習に関しては，このような移行や連携の在り方とは質の異なる課題が小学校中学年レベル（B）に内在する。保幼小の移行，いわゆる「架け橋期」の課題が異校園種の接続にかかる課題であることに対して，音楽学習における課題は，音楽的認知の質的転換期に起因するものである。

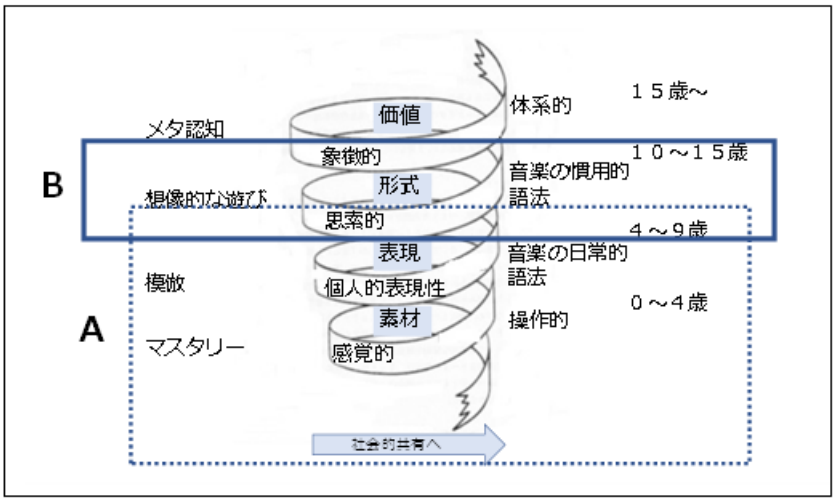

図 1．スワンウィックの螺旋状過程における本研究の位置づけ

Swanwick, K.（1992）による「音楽的発展の螺旋状過程（図 1）は，「素材」との関わりを基盤とし，「表現」「形式」「価値」へと発展する過程（中心網掛け部分）において，「社会的共有（図 1 下矢印）」を重視している点で音楽教育研究に新しい視点を提供したと言えよう。幼児期の体験が児童期の学びへと移行するためには，外界との相互作用の過程を意識化し，自分自身を変化させる，つまり体験を経験にすることが重要である。その際に「社会的共有」は欠かすことのできない要因となる（図 1. A）。

ところで，図 1 の B（9 歳から 15 歳）の質的転換期では，多様な音楽学習の壁（つまずき）が教育課題となっている。この時期には，「図と地の分化の確立」という音楽的認知の節目を迎えることから，【基盤研究(C)(一般)・2017-2019 年度(No.26381196)】『音楽的経験に関する Performance Assessment の開発(17K04771)』では，受動的音楽活動（鑑賞）におけるルーブリックを開発した（根津ら，2020）。

表 1.「図と地の分化」に焦点を当てたルーブリック（根津, 2019）

	音響	知覚	構造	象徴	立体的空間感覚	映像理解
A	アンサンブルを味わって鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解し、言語化できる。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解し、言語化できる。	標題音楽として理解し、言語化できる。	アンサンブルの全体像（形態）を理解しながら鑑賞することができる。	補助的な映像を基に、曲想を理解することができる。
B	アンサンブルを鑑賞することができる。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できるが、言語化できない。	独自のイメージで音楽を言語化することができる。	アンサンブルを理解し、鑑賞することができる。	補助的な映像と音楽を連結することが難しい。
C	アンサンブルを鑑賞することができない。	メロディーと伴奏の関係を理解できるが、言語化できない。	メロディーと伴奏のホモフォニックな関係を理解できない。	イメージすることができない。	アンサンブルを理解して鑑賞できない。	補助的な映像の理解ができない。

しかし，このルーブリックについて 2 点の改善点が生じた。それは，時間経過を伴ったパフォーマンスの変容を記述することが困難であることであること，狭義の聴覚的なゲシュタルトに特化している点である。これらについて，Boxill, E. H.は，外界のモノ・コトを図（figure）として前景に浮かび上がらせ，地（ground）と明瞭に区別できることを「awareness（気づき）」として重視し，その変容についての評価可能なモデルを提示している。このことからこのモデルがパフォーマンス評価のツールとして有用であるかの検討が必要となった。

２．研究の目的

本研究では，音楽学習に関するパフォーマンス評価を検討し，音楽学習における支援を類型化することを目的とした。特に，音楽学習の壁（つまずき）が課題となっている小学校中学年レベルの音楽的認知の特性である「図と地の分化」に焦点を当てた。

３．研究の方法

パフォーマンス評価とは，現実的で文脈のある課題や活動を遂行することにより評価するものであり，ルーブリックは，学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示したものである。前述したように，音楽活動に関するパフォーマンス評価をルーブリックに留めることには限界があると考えるに至ったことから，本研究では，音楽的対話のモデル（根津，2002），活動システム（Engeström, Y., 1987），覚識の連続体（Boxill, E.H.,1985）を活用したパフォーマンスの分析を試みた。

しかし，研究課題採択と同時にコロナ禍となりフィールド調査が制限されたため，蓄積してきた活動コンテンツの分析を優先し，状況によって新たな活動を創出するという柔軟性をもった 2 方向からのアプローチを行った。以下，3 モデルを概観する。

（1）創造的音楽活動モデル（根津，2002）

Bruner, J.S.（1915-2016）の言語獲得理論およびノードフ・ロビンズ音楽療法（創造的音楽療法）に依拠したもので，実践者と対象者が相互のパフォーマンスを認知すると同時に応答するという深層構造（図 2 横矢印）を基盤としながら，音楽の流れ（文脈）を即興的に生成するという「音楽的対話」を重視するものである（縦矢印）。

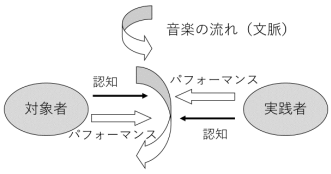

図 2.　音楽的対話（根津，2002）

（2）活動システム

活動システムは，Engeström, Y.（1987）の「文化・歴史的活動理論（cultural-historical activity theory）」に基づいており，人間活動を新たにデザインしていくための理論的フレームワークである。この理論の援用によってコミュニティにおけるパフォーマンスがどのように拡張されるかを可視化することが可能となる。

（3）覚識の連続体

Boxill, E.H.は，「気づき（awareness）」の諸相を「覚識の連続体（continuum of awareness）」として定式化し，「覚識の喚起する―高める―拡張する」ための道具や媒介として音楽を機能的に用いている。また，「気づき」の拡張のために「反射」「確認」などで応答することから，実践と関わりながらパフォーマンスを解釈する点で（1）創造的音楽モデルと共通している。

（4）分析対象

本報告書では，A 県 B 市郊外の C 小学校特別支援学級教室において，201X 年～201X＋6 年に年 4 回実施した創造的音楽活動を取り上げる。

４．研究成果

（1）特別支援学級の創造的音楽活動における支援の変容

根津ら（2021）および根津（2022）では，支援が必要な児童らと担任教諭，特別教育支援員からなるコミュニティのパフォーマンスの変容を可視化し（図 3），支援の在り方について考察した。創造的音楽活動モデルにおいては，グループの状態によって実践者（P）と子ども達（C）の関係の構造が異なることから，グループダイナミクスの状態や活動の成熟度を把握するためのツールとして有用であることが示唆された。

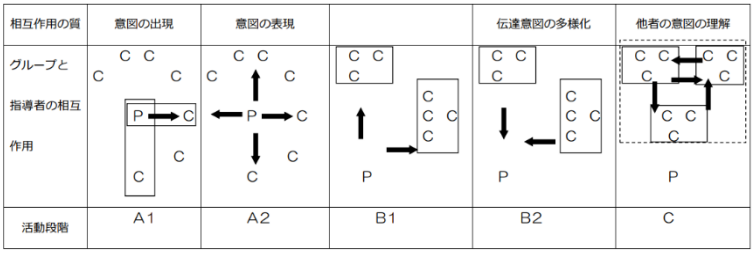

図 3. 実践者と子ども／グループの変容（創造的音楽活動モデルによる）

同じ実践について，活動システムを援用して可視化したものが図 4 と 5 である。活動システムで比較することにより，特別支援学級の複数名の支援補助員の活動への参加状態を把握することが可能となった。例えば，活動開始 2 年後は，活動の中心はリーダー（筆者）であり，担任教諭はリーダーのアシスタントとして，そして支援補助員は子ども達に身体的・具体的介助を行う傾向にあった（図 4）。図 5 は，2 年後の活動システムであるが，参加者全員が柔軟な役割交替をし，創造的音楽活動全体を支援する役割を担うことが可能になったことを読み取ることが

できる。

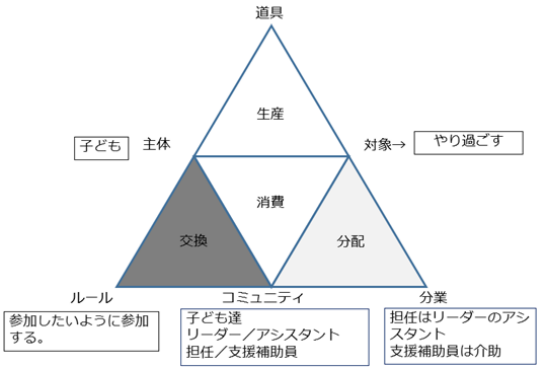

図 4. 201X＋2 年の活動システム

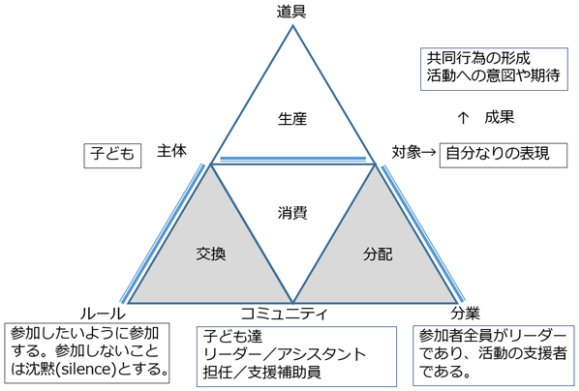

図 5. 201X＋4 年の活動システム

当該実践の分析対象とした創造的音楽活動におけるパフォーマンス（『かえるの合唱』）について，活動開始時の子ども達の関心は，カエルの身体模倣（運動性）と即興音楽の速度や音量の変化を要求することであったが，徐々にその関心は子ども達の生活世界における関心のコト・モノ（お坊さん，ダンサー，原学級での合奏）になっていき，それらに気づいた支援員らは子ども達の関心事が「図」になるように活動全体をリードするコミュニティに変容していった（図 5.右下分業）。

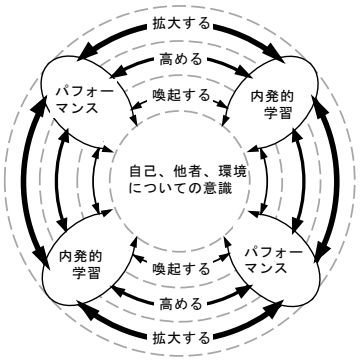

図 6. 覚識の連続体の改変モデル（根津・吉澤ら，2020）

「覚識の連続体」をパフォーマンス評価のツールにすることによって，子ども達の関心のあるコト・モノがどのように図となって前景に浮かび上がるのか，地となる音楽的対話を全員で創出するためにはどのような支援が必要かに関する説明が可能になった。

ところで，パフォーマンスを阻害する要因には，「身体・運動」「認知」「技能」「心理」「文化」「環境」の 6 つの視点を挙げることができる。創造的音楽活動においては，子ども達の「環境」への気づきを促すことによって，「心理」「認知」に関する支援の方向性が共有されることが示唆された。

（2）カンボジアの小学校における合奏支援

本研究では，カンボジアでのアクションリサーチを予定していたが，コロナ禍により研究期間中の渡航は実現できなかったため，過去の映像データ（2001-2019）を再考することで代替した。具体的な支援には限界があったが，小学校の合奏支援に関する関係者との省察や過去の映像の分析を通して，異文化における音楽学習の支援に関する新たな視座を得ることができた。

写真 1. 鍵盤ハーモニカの棚

写真 2. 何度も書き換えられた鍵盤

カンボジアの小学校との関わりは，鍵盤ハーモニカの寄付に伴った教科書の開発に関わった 2001 年に遡る。長期にわたる内戦の影響で教育環境が劣悪であったカンボジアの小学校建設や

楽器の寄付という一連の行為は，SDG‘s の目標 4 と 5 に該当するものである。

目標 4〔質の高い教育をみんなに〕「すべての人に包括的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」	目標 1〔貧困をなくそう〕「あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる」

図 7. 研究開始時の SDG’s の目標

2019 年に行った S 州 H 小学校での調査，および 2001 年以降のデータの再考を通して，カンボジアの音楽活動における「つまずき」は，異なる音律という「文化」的側面や，音楽学習が保証されていないという「環境」的側面に起因されるものであることが明らかになった。しかし，異文化の音楽学習を介して子ども達に「カンボジアの音楽や歴史への気づき」が起こり，パフォーマンスが変容していった過程は，「覚識の連続体」の「喚起する—高める—拡大する」として解釈を拡げることができる。

しかし，H 小学校の子ども達は，自国の音楽文化とは異なる新たな記号（ドレミファソラシド）を母国語であるクメール語に翻訳して学習している（写真 2）。高温多湿の環境下にある小学校であっても，除湿器や保管する棚はない。水道設備も充分でない状況下では楽器の衛生を保つことも困難である。楽器の修理の知識や技術もないことから，使えなくなった鍵盤ハーモニカの処分に困っているという現状がある。

目標 6〔安全な水とトイレを世界中に〕「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」	目標 12〔つくる責任　つかう責任〕「持続可能な消費生産形態を確保する」

図 8.本研究によって得られた SDG‘s の目標

現段階では，楽器を廃棄する手段がなく，日本で処分する場合であっても高額の運賃が発生することになる。これは，支援どころか負の遺産を生み出すことを意味している。これは，SDG‘s の 6 と 12 にかかるものと考える。新たな支援方法の検討が喫緊の課題である。

（3）まとめ

本研究を通して,「音楽的対話モデル」は音楽活動のミクロ分析に有効であり,「覚識の連続体」は，マクロ分析に有効であることが示唆された。また「活動システム」は，音楽学習の拡張やコミュニティの質変容を可視化できる点で，有用であることが示唆された。

しかしながら，本研究で焦点を当てた Boxill 理論について，内外での研究は進んでいない。Boxill 自身は「覚識の連続体」があらゆる発達段階に有効であると言及しているが，モデル自体がゲシュタルト療法の流れを受けており，その理解には専門性が求められることがその普及を阻んでいると考えることができる。

そのような中，本研究の研究期間内に，「覚識の連続体」に関する 2 本の査読論文を提出し，そのうち日本芸術療法学会誌では，図 6 示した改良モデルを提示することができた。今後は，実践現場での評価ツールとしての有用性を検討する予定である。

＜参考文献＞

Boxill, E. H. : Music Therapy for the Developmentally Disabled. An Aspen Publication (1985)
林庸二・稲田雅美訳：『実践・発達障害児のための音楽療法』人間と歴史社（2003）
Engeström,Y. : Learning by expanding An activity-theoretical approach to developmental research, Helsinki: Orienta- Konsultit （1987）
山住勝広ほか訳：『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社（2009）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　16件）

１．著者名 根津知佳子・松本金矢	４．巻 第70号
２．論文標題 “モノづくり”と“コトづくり”の融合 ― 家族支援におけるミュージッキング―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学紀要家政学部』	６．最初と最後の頁 pp.9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 根津知佳子・和田直人・安藤朗子・甲斐聖子・吉澤一弥	４．巻 第29号
２．論文標題 ウィリアムズ症候群における「図と地」の多角的検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』	６．最初と最後の頁 pp.261-269
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 根津知佳子	４．巻 第45号
２．論文標題 カンボジアにおける合奏支援ーSDGsの視点からー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『春秋』三重大学退職教員有志の会 春秋会 機関誌	６．最初と最後の頁 pp.62-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人・安藤朗子	４．巻 第25号
２．論文標題 ウィリアムズ症候群のための”支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学総合研究所紀要』	６．最初と最後の頁 pp.92-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 小田桜乃・根津知佳子	４．巻 第29号
２．論文標題 日本で行われている音楽活動エル・システマの可能性と課題 －ホワイトハンドコーラスに焦点を当てて－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』	６．最初と最後の頁 pp.57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 織壁佐和子・根津知佳子	４．巻 第29号
２．論文標題 ライフステージを展望した材の活用と実践	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』	６．最初と最後の頁 pp.67-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 日下瑤子・加畑奈美・根津知佳子	４．巻 第29号
２．論文標題 多様な発達段階を対象とした参加型コンサートの開発 －０歳からの音楽会の事例を通して－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』	６．最初と最後の頁 pp.213-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 安藤朗子・吉澤一弥・和田直人・甲斐聖子・根津知佳子	４．巻 第29号
２．論文標題 ウィリアムズ症候群のきょうだいに関する研究 －障害児・者のきょうだい研究の概観と本研究の方向性の検討－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』	６．最初と最後の頁 pp.235-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第6号
2．論文標題 コロナ禍における<集団的即興>	5．発行年 2021年
3．雑誌名 活動理論研究	6．最初と最後の頁 pp.13-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 第69号
2．論文標題 創造的音楽活動における表現と生活世界の往還	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6．最初と最後の頁 pp.31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 -
2．論文標題 PBL対話的事例シナリオ教育カリキュラムと評価の事例集　専門教育科目	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究	6．最初と最後の頁 pp.75-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 -
2．論文標題 PBL対話的事例シナリオ教育の授業と評価の構造	5．発行年 2022年
3．雑誌名 対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究	6．最初と最後の頁 pp.120-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子	4．巻 44
2．論文標題 同質の原理を再考する―FM放送プログラム―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 三重大学退職教員有志の会　『春秋』	6．最初と最後の頁 pp.60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子・吉澤一弥・角藤比呂志・和田直人	4．巻 Vol.51 No.2
2．論文標題 ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本芸術療法学会誌	6．最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子・吉澤一弥	4．巻 第49巻
2．論文標題 音楽療法における即興技法―“覚識の連続体”に着目して―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本音楽心理学音楽療法研究年報	6．最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 根津知佳子・川見夕貴・和田朝美	4．巻 第68号
2．論文標題 音楽療法的アプローチの可能性と課題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本女子大学家政学部紀要	6．最初と最後の頁 pp.27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人	４．巻 第23号
２．論文標題 ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究―主として投影法心理検査を用いた解析―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本女子大学総合研究所紀要	６．最初と最後の頁 pp.143-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 根津知佳子
２．発表標題 創造的音楽活動を軸とした授業づくりの可能性
３．学会等名 「拡張する学校を創る」第1回研究会（関西大学・オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉澤一弥・根津知佳子
２．発表標題 ウィリアムズとその家族の支援　活動における協働の変容
３．学会等名 第８回活動理論学会研究大会（関西大学・オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 根津知佳子・赤木和重（指定討論）・山田康彦・森脇健夫・前原裕樹他
２．発表標題 対人援助専門職養成に寄与するPBL対話的事例シナリオ教育の探求―非認知能力に着目して―
３．学会等名 第29回大学教育研究フォーラム参加者企画セッション2（京都大学・オンライン）
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉澤一弥・根津知佳子
２．発表標題 ウィリアムズ症候群の発達支援の枠組みの拡張－２つの活動システムの理論階層的水準の移行を中心に－
３．学会等名 第33回日本発達心理学会（オンライン開催）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重他
２．発表標題 コンセプトマップを活用した教員養成カリキュラムと評価方法の開発-対話的事例シナリオを核として-
３．学会等名 第27回大学教育研究フォーラム「参加者企画セッション」（オンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉澤一弥・根津知佳子
２．発表標題 ウィリアムズ症候群の音楽療法における発達支援の枠組み－実践と研究プロジェクトの 2 つの活動システムの連携と拡張的実践から－
３．学会等名 日本発達心理学会ポスター発表（オンライン開催）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 山住勝広・冨澤美千子・白數哲久・伊藤大輔・根津知佳子・浅野吉英・畠山大・山田直之	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 300
３．書名 拡張的学習と教育イノベーション　活動理論との対話	

１．著者名 杉田正明・片野秀樹編・根津知佳子他著	４．発行年 2021年
２．出版社 メディカ出版	５．総ページ数 225
３．書名 『休養学基礎』セクション６「休養の具体的方法と理論　音楽」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Sound & Silence
http://www.chikakotsukioka.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関